



安心とつるおの下の町川の手をめぐって

# 防災まちづくり瓦版

平成11年12月10日

発行一寺言問を防災のまちにする会

いちでらことい  
**一寺言問/防災まちづくり瓦版**  
 編集/一寺言問を防災のまちにする会・編集局  
 発行/一寺言問を防災のまちにする会  
 代表 則武勝商  
 連絡先/墨田区まちづくり事業推進部地域整備課内  
 〒130 墨田区吾妻橋1-23-20 Tel.(5608)6261

わいわい会  
 高橋昌巳  
 この記事の標題は  
 一言会副会長 中沢さん

# 昔の水害今は皆が忘れてる



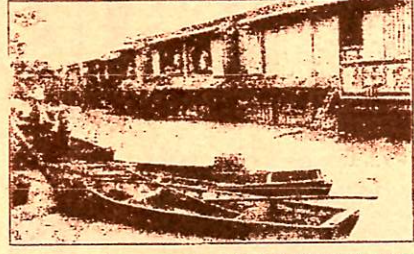
私たちのまちの洪水は昔の錦絵にも描かれています。

「荒れる川」荒川と放水路  
 私たちのまちは、大きく捉えると、隅田川と荒川の三角州の中にあります。この二つの川ですが、隅田川が本来の荒川であり、今の荒川は、ひんぱんに起きていた洪水を防ぐために掘られた放水路だったのです。

この放水路がつけられるきっかけとなったのは、明治四十三年の大水害です。豪雨により利根川の堤防が決壊し、その濁流が綾瀬川、荒川(隅田川)に押し寄せて大氾濫を起こしました。全域では一五〇万人もの被災者が出るほどで、私たちのまちでも一階部分まで水が上がったそうです。

西暦	年号	荒川の水害
1742	寛保2	8月大洪水(堤防こわれる)
1791	寛政2	8月大洪水(堤防こわれる)
1824	文政2	7月大洪水(堤防こわれる)
1859	安政6	7月大洪水(堤防こわれる)
1869	明治2	9月洪水(堤防440箇所こわれる)
1870	3	9月洪水(堤防60箇所こわれる)
1898	13	8月洪水(堤防25箇所こわれる)
1907	40	8月大洪水(堤防50箇所こわれる)
1910	43	8月大洪水(堤防15ヶ所、300箇所以上こわれる)
1911	44	●荒川放水路の工事はじまる
1914	大正3	8月洪水(堤防9ヶ所こわれる)
1917	6	10月高潮による被害あり
1922	11	8月洪水(堤防される)
1928	昭和3	7月洪水(堤防される)
1930	5	●荒川放水路完成
1941	16	7月大洪水(堤防される)
1947	22	9月大洪水(堤防される)
1948	23	9月洪水
1957	32	9月洪水

「荒れる川」の名の通り、荒川の洪水はひんぱんに起きていました。  
 (網田幸恵著『荒川放水路物語』より作成)



明治43年の水害。(上)白鬚神社付近 (下)須崎町(今の向島5丁目辺り)

ところで毎年のように水害にあつていた人々は、万一のための備えをしていました。水塚(みずか)と呼ばれる土を盛った高台に離れの家を建てたり、軒先に小舟をぶら下げておいたり。住んでいる人々がそれぞれに工夫して、水害をのりこえようとしてきたのです。

### 地盤沈下や都市化に伴う水害

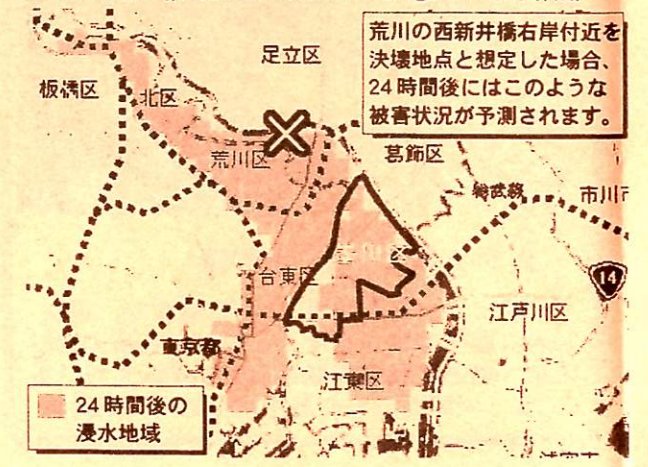
放水路の完成により治水は安定しましたが、大正から昭和初期に地下水が過剰にみ上げられ、地盤沈下が進みました。すると堤防内の地域では、高潮の被害や、雨水が自然に排出されないために起こる浸水の被害に、たびたび見まわれるようになりました。堤防のかさ上げやポンプの設置、下水道の普及などにより被害は軽減しましたが、現在でも満潮時には水面下となる地域が多くあります。

さらに近年では、地表面の多くがコンクリートにおおわれて雨水が地中へ浸透しにくくなったため、豪雨時に雨水の排除が困難となることもあるのです。その対策として、雨水の貯留(貯める)施設や浸透設備の設置が行われていますが、私たちのまちから広がった雨水利用も、雨水を貯留する効果が期待されています。

### 水害に対する心構え

私たちのまちでは、長い間、人々が水害とたたかってきました。しかし今も、例えば荒川では、二〇〇年に一度という大雨に対しては水害対策がまだ対応しきれていないのが実情です。水害を、私たちのまちの災害として、心に留めておくことが大切なのではないのでしょうか。

【洪水シミュレーション】もしあの堤防が決壊したら！  
 200年に一度という大雨が降って堤防が決壊したとしたら、私たちのまちはどうなるのでしょうか？  
 (建設省作成の洪水氾濫シミュレーション <http://www.ara.or.jp/bousai/water/sim/arage.html> より作成)



## 有季園利用者募集

あなたも、向島有季園(向島5-35)で、楽しい野菜づくり・花づくりを体験してみませんか。

ご希望の方は、官製はがきに右下の「応募券」を貼り、住所・氏名・電話番号をご記入の上、左記へお申し込みください。応募者多数の場合は、二月に「公開抽選会」を行います。

【利用期間】  
 平成十二年三月一日  
 ～平成十四年一月三十一日

【応募条件】  
 一 寺言問地区(堤通一丁目、東向島一・三丁目、向島五丁目)にお住まいの方  
 まいの方  
 【申し込み先】  
 〒131-0032  
 墨田区東向島一-11-13  
 一言会々長 則武勝商

【締め切り】  
 平成十二年一月三十一日(必着)

※利用者は、次の事項を守ってください  
 ☆二年間、本人が責任を持って利用する  
 ☆年二回の利用者会議に出席する  
 ☆六月に実施の園周辺生け垣剪定会に参加する  
 ☆園の近隣居住の方に迷惑をかけるない

お問い合わせは 有季園担当理事 阿部  
 〒3622-0542







・大道芸がやってきた  
9月4日、ハトの街商店街の広場「ハトホット」に、南京玉スダレ・ガマの油の口上売りや一輪車乗り・紙切りなどの大道芸がやってきました。子ども達も興味津々でした。



・一寺小 誕生120歳を祝う  
10月8日、区立第一寺島小学校の創立120周年を祝う式典が、「地域に学び、地域で学ぶ」をテーマとした児童発表を中心に、山崎区長をはじめ多数のご来賓をお招きし盛大に催された。



・39ヵ町連合防災訓練  
11月7日、向島地区39ヵ町連合で、午前10時に震災発生を想定し、町内の各所で初期消火・救急・負傷者搬送などの訓練を行いました。（写真は東向島中町の消火訓練）

## もし東京に大きな

### 震災が起きたら

建物壊れ、大きな火災が発生する。電気や水道が止まり、電話も通じない。

心配事はいろいろありますが、被災した町の中で、私たちはどのような生活をおくることになるのでしょうか？  
防災の専門家達が企画した、壮大な実験が七月二三日（金）〜二六日（月）、「国営昭和記念公園（立川市・昭島市）」で行われました。

この企画に参加したのは、都内各地の自治会防災部、消防関係者、区役所や市役所の防災担当、ボランティア関係者、情報を聞きつけて集まった一般参加者など、延べ千人を越えました。

参加者は限られた物資や資機材だけを頼りに、被災生活を疑似体験しました。

このキャンプを通じて、実際の被災生活においても発生しそうな様々な問題が明らかになりました。とりわけ、ここに紹介する内容は、日頃の防災まちづくりを考えていく上でも、参考になるものと思えます。

## 『1,000人の仮説市街地づくり』

# 震災サバイバル・キャンプ体験記

(株) マヌ都市建築事務所 神谷 秀美

### ●“村長”の選出をめぐって

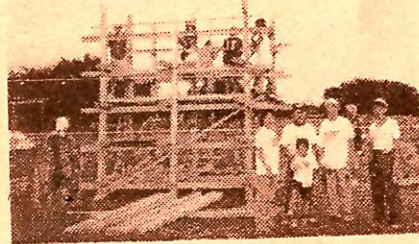
参加者はいくつかの“村”に分かれ、“村”ごとに生活ルールを話し合いながら、共同生活を送りました。

ある村では“村民”をいくつかの班に分け、炊事、トイレ掃除、夜警などは各班が当番制で行うことにしました。そして、全体の調整役として“村長”を決めることにしました。

各村には、実行委員会から学生ボランティアが派遣されていました。その学生に“村長”をお願いしようという意見が強かったのですが、学生は「自分はボランティアだから“村民”から選んでほしい」と辞退しました。この学生の意見に対して、「ボランティアも一緒に生活するのだから“村民”のひとりだ」という意見もありました。結局は“村民”から“村長”が選ばれましたが、ボランティアとはなにをする人か、“村長”とは何をする人か、改めて考えさせられました。

### ●食事がきっかけの「イライラ」

夕飯の炊き出しは、各村の有志が学生ボランティアとともに共同炊事場の設置を行い、全ての村の分を一括して行いました。各村に当番の割当てがあったわけではなく、学生ボランティアの呼びかけに応じた人が自主的に行ったようでした。



### ●夕食の配給は、

村ごとに行われませんでした。他の“村”が既に食事を始めていても、夕食が届かず待っている村では、イライラする“村民”が見られ始めました。

### ●情報不足に

夕食後に、当番の確認を兼ねた反省会が行われました。当番と言っても、やらなければならぬと分かっていることは意外と少なく、実際は問題が起きる度に、その場に居合わせた人が自主的に問題を解決するしかないのです。それぞれが思い思いの行動をしているため、全員に問題を説明し、意見を認めることは不可能でした。

反省会では、そんな情報不足の状態に対する不満が多く出されましたが、解決方法が見つからず、各自が自主的に取り組むことになりました。

●自分のことを自分でできる人は強い  
翌日になって、昨夜快適に眠れなかった人々は、会場内で余っている物資を探し回り、何とか工夫して快適な生活環境づくりに取り組み始めました。

一方で、早い時期に自分の生活環境を整えてしまい、キャンプ生活を満喫している家族がいました。割り当てられたテントは家族の茶の間のようです。子ども達は元気に原っぱを走り回り、ほのぼのとした雰囲気の中に、生活のたくましさを感じさせられました。

●各自の取り組みが“村”を成長させる  
一夜の滞在で去る人と新たに滞在する人が入れ替わりました。

新たな“村民”は、勝手が分からず、昨夜の滞在者と同じで苦勞を繰り返すかもしれません。しかし、それまでの滞在者がそれまでの経験や工夫を新しい人々に伝え、新たな取り組みに活かしていくことで、苦勞や失敗を繰り返しながらも、徐々に生活の技術やルールが完成され、生活しやすい“村”へと成長していくでしょう。

# 私がまちがどスタッフです

その41  
副会長  
大内嘉一さん



平成11年5月東向一南町会の町会長に就任された。元町会長、大内嘉平さんのご子息で、嘉平さん亡きあと、嘉一さんも父上と同じ道をおゆみ、厚生部、副会長をへて町会の司令塔になった。

昭和13年墨田区生永。少年時代は疎開先の田舎、茨城県ですごし、中学入学時に両親のもと、現在のすまいに帰ってくる。3男2女5人兄弟の長男であり、兄弟協力して父親を助け、夜遅くまで働き鉄工所をもちたててきた。

現在大内鉄工所では、コンピューターを導入して、より精密・高度な金型製作に対応しているが、海外、東南アジアなどの国とのローコスト勝負になると、「日本産業をささえている中小企業の技術や職人そのものが消滅してしまうのではないかと危惧されている。

町会長になって「出かけることが多くなり出会いがあって楽しい。毎日充実している。」とおっしゃる。お顔は柔知で円熟相だが、お酒もやらず、「趣味は働くこと。た」と言う。

どうやら性格は、仕事と同じでかなりおカタいようだ。